

7. 和東町における地域学習活動の実施報告

菱田 哲郎・瀬川 裕太郎・藤川 聖起

1. はじめに

和東町史の編さんに京都府立大学文学部考古学研究室として取り組む中で、調査だけではなくその活用についての事業にも参画できるようにしてきた。2021年度には「和東町史編さん室展示」での古墳の調査成果の展示と解説を学生がおこない、また「学ぼう和東の歴史」と題した小学生向けのプログラムにおいても学生が主体となって解説をおこなった（尾野ほか2022）。本年度においても、町史編さん室の渡邊久仁太氏から相楽東部広域連合教育委員会生涯学習課が実施する「あそび塾ウォークラリー」への協力を要請され、学内で検討した結果、和東町内での古墳調査経験をもつ藤川聖起（京都大学大学院修士課程1年）と瀬川裕太郎（博士前期課程1年）、さらに西島翼（学部4年）を中心に、学生主体で取り組むこととした。単に古墳などの文化財を小学生に紹介するだけでなく、これまでの町史編さんの調査で明らかになったことを、より平易に伝えることで、地域の文化財のおもしろさや大切さを伝えられることを目標とした。このような取り組みは、学生の発信能力の向上にもつながっていると考えられ、ここでの経験が他の事業にもよい影響を及ぼしていると考えている。（菱田哲郎）

2. 事前準備

5月に、藤川、瀬川、西島が学生代表に決定した。7月3日に、町史編さん室との打ち合わせと実地見学をおこない、当日のスケジュールとチェックポイントを相談し、今後の進め方を話し合った。打ち合わせ内容に基づき、学生は当日使用する資料やクイズの作成を進めた。9月28日に町史編さん室とオンラインで打ち合わせをおこない、学生側の進捗、当日スケジュールやチェックポイントなどを確認した。この際、事前PRのために和東小学校に訪問することが決定した。10月は、当日の資料準備と事前PRの準備を並行した。事前PRは10月23日におこなわれ、藤川、瀬川、西島の3名が訪問した。簡単なクイズや「ハニワマスター」と名付けた人物埴輪のかぶりものを使用し、児童たちの前で15分程度のPRをおこなった（写真1）。その翌日に、生涯学習課から小学校にチラシを配布した。11月に入ると、参加者が児童13名（1年生2人、2年生2人、3年生2人、4年生4人、5年生1人、6年生2人）、保護者6名の計19名となることが決定し、引率補助として石川達葵、岡崎壮太、越川輝、依田萌奈（以上、学部3年）が参加することとなった。11月8日に学生全体で打ち合わせをおこない、当日の流れを確認した。（瀬川裕太郎）



写真1 事前PRの様子



写真2 福塚古墳での活動の様子

3. 当日の様子

当日はまず体験交流センターに集合して車で太鼓山古墳（伝安積親王墓）まで移動し太鼓山古墳から福塚古墳・和東天満宮へは徒歩で移動した。イベントは和東天満宮で解散とした。

太鼓山古墳では、「古墳とは何か」についてクイズを出題し、「和東町史編さん室展示」の際に作成した古墳マップの改訂版を用いて、町内の古墳を紹介した。太鼓山古墳から福塚古墳・和東天満宮への移動の途中では、和東町観光案内所付近でお茶に関するクイズの時間をとり、和東町とお茶の関係について理解を深めてもらった。福塚古墳では、ハニワマスターが解説し、盛況を呈した。特に福塚古墳で採集した円筒埴輪片を実際に触ってもらおうと、児童も保護者も、普段はあまり見ることはない実物資料を熱心に観察していた。またこの際、円筒埴輪のレプリカを用意した。そして埴輪片がどこの部分に当たるかを、レプリカと見比べて検討することで大いに盛り上がり、本イベントのハイライトとなった（写真2）。和東天満宮は、本殿が重要文化財に指定されていることや、境内にある石燈籠に刻まれた文字から様々な歴史が読み解けることを説明した。説明後に本殿近くまで入ってもらおうと、石燈籠に刻まれた文字をライトで照らしながら読む姿が多く見られ、参加者の興味を引く取り組みとなったようである。

4. おわりに

今回のあそび塾ウォークラリーには、小学校への事前PRの成果もあり学年を問わず多くの児童が参加してくれた。授業で歴史を学習していない児童が大半にも関わらず、出題したクイズを容易に解く姿が多く見られ、地域の文化遺産について理解度が高いことが目立った。2021年度のイベントに参加していた児童もおり、文化遺産の活用を継続的におこなうことで、児童たちが地域の文化遺産に興味をもつ環境が醸成されていることを実感した。このように、和東町では定期的にイベントを開催し、地域の方々が文化遺産に触れる機会を作り出せている。こうしたイベントを通して文化遺産の魅力を知る人が増え、次回はより多くの方に参加してもらえるという良い流れが生まれつつある。この流れを加速させるために、今後も町と大学が協力しながら文化遺産を活用した取り組みを継続することが重要であると考えます。（藤川聖起）

参考文献

尾野和広・菱田哲郎・土井悠起 2022 「和東町における文化遺産の活用」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科

編集後記

フィールド集報の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの考古・建築・地理・文化情報の合同実習メニューとして学生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっている。

今年度は、3年ぶりに多様な場所・フィールドで調査をおこなうことができた。調査時だけでなくその後の作業においても多くの方々からご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。

海外の調査も徐々にではあるが再開されるようになった。来年度はまた違うところに行きたいと思う今日この頃である。(き)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第10号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
